

あづまびと みやごびと つれづれぐさ  
吾妻人と都人（『徒然草』）

『徒然草』は14世紀前半、鎌倉時代の終りから南北朝時代の初めにかけて書かれた随筆です。作者は兼好法師で、「つれづれなるままに、日暮らし、硯にむかひて」と始まる書き出しの文はよく知られています。『徒然草』は序段および243の長短の段から成っており、多くの段で仏教的な無常観が示されていますが、その一方で現世を生きる上での処世訓を語る段や世の中の興味深いできごとを記した段もあり、変化に富んだ豊かな内容の作品となっています。

テキストは『徒然草』の第141段です。この段で兼好法師は悲田院の堯蓮上人という僧侶が同郷の人に話したことを紹介し、それについての感想を述べています。

「吾妻」は都から見て東方の国々で、主に現在の関東地方一帯を指しています。堯蓮上人は「吾妻人」つまり東国の人々と「都の人」つまり京都の人々を比べて、その性格の違い——より具体的に言えばコミュニケーションのしかたの違いについて論じています。堯蓮上人はもともと「吾妻人」ですから、そちらの味方をしそうなものですが、そうではなくて、「都の人」の事情をよく理解し、「都の人」に同情的な発言をしています。兼好はもちろん「都の人」ですから、堯蓮上人のそのような態度を好ましく思ったのかもしれませんが。